

東日本大震災から14年

今日3月11日は、東日本大震災から14年の年月が経ちます。この震災は、日本国内で観測されたマグニチュードは観測史上最大規模で、21世紀に入って最大級の災害と言われています。東日本大震災では大きな揺れだけではなく、未曾有の大津波も巻き起こし、原発問題も提起しました。

さて、毎年この時期になると、正門前とターザンロープ前の南側の花壇に、黄色い水仙が咲きます(今年の開花は、どうやら明日の様です)。この水仙は、東日本大震災で被災された岩手県一関市の商工会の方々が送ってくださったそうです。今年、24歳になる帯西の卒業生が、4年生のときに、ボランティアで、津波で流された宮城県気仙沼市の階上小学校へ国語辞典や絵本を贈る活動を始め、それが学校全体に広がりました。その支援の中で、被災地からの思いとして、水仙が送られてきました。宮城で津波に襲われた方々が、絶望の淵に立たれていたとき、自宅の瓦礫の中に咲く水仙を見て希望を感じ、それから「希望の花」と称されているそうです。

正門付近の九州に長く自生する水仙は、2月頃からいい香りを漂わせながら咲き始めますが、この東北の水仙だけは、3月11日を待っているかのように、その前後に咲き始めます(右写真は、咲いているときの様子)。



現在、東日本大震災の被災地は確実に復興へと向かっていますが、未だに避難生活を強いられている人がいるのも現状です。その後も日本列島は、熊本地震、能登半島地震と相次ぐ自然災害に見舞われていますが、これらの災害による犠牲者の方々の御冥福をお祈りすると共に、「希望の花」が真の意味での「希望」となるよう、教訓を活かした国づくりを政治には求めていきたいと思っています。

わくわくチルドレン

「もっとわくわく通信149号」でお知らせしていた、「全国小学生プログラミング大会」が3月2日、東京都で開催され、帯西4年生の井澤 駆さんが入賞を果たしました。このことは、3月3日の熊日新聞朝刊にも大きく掲載されています。全国から総勢1284組が参加した地方大会を勝ち抜いた各都道府県大会代表47組がエントリーした大会でした。井澤さんは、世界各国に比べて日本の子供たちの「幸福度」が低いとの調査結果に着目し、旅に出たり花を植えたりすることで自己肯定感を高めるアプリを作りました。井澤さんは「苦勞して作った作品なので全国大会で入賞できて嬉しいです。自己肯定感を自分で感じることは難しいのですが、姉から『前より生活している姿が楽しそうに見える。』と言われ、自分でも自己肯定感が高まっていると思います。」と述べています。

